

世界でもっとも治安のいい町

世界でもっとも治安のいい町はどこだと思いますか？ そう。答えは、カジノで有名なラスベガスです。

トルコの Cappadocia で旅行中の女子大生 2 人が暴漢に襲われ、残念ながら 1 人が亡くなった。(この 2 人は、ノーマルな女子大生などではなく、外国語も修得し、外国でも活動していた、今どき珍しくよくできた子らだったという。トルコ語も学んでいたのでは、という情報もある。犯人と思われる男が捕まったとき、この男が言うところでは、直接顔を見てこの男ではない、という表情をした、という。) 容疑者は前歴がいくつもある大きな男であった。・・・

ゴルゴ 13 に載っていたのだが、ある刑事が、「変態が刑務所で治るか！！」 翌日か翌々日か、どうやら誤認逮捕か？ 共犯か？ という、酷似した別の男が拘束されている、という情報が流れた。・・・殺されるという状況の中のことである。警察もよく似た男と間違えた可能性もあるが、それにしても、気丈な子である。・・・結局この男が犯人だった。理由はまだわからない。

日本でもある。殺人容疑で逮捕された男が、代用監獄に留置されていたことを朝日新聞が大騒ぎし、釈放されてしまった。野に放たれてすぐに 2 人を襲撃した。だから言わんこっちゃない。こんなのは、ずっと社会から隔離しなければならないのだ。この件で、警察や裁判官や朝日新聞が新たな被害者や遺族に謝罪した、などというのは聞いたことがない。

先の 2 人のために、トルコ人たちが日本語で書いた謝罪のプラカードを掲げて、数百人が列を成して奇岩の犯罪の場所に集まっていく画面がでた。国民を代表してお詫びする、と集まった人々が口々に言う。日本の観光客にも言う。

理由はいくつもあるだろう。ひとつは、Cappadocia のような有名で世界遺産にも指定されているところでは、観光で生活している人が多い。そういう所で凶悪な犯罪が発生したら観光客が来なくなる恐れがある。客が減少ないし激減すると、生活の糧がなくなることになる。警察の勇み足もこれが原因かもしれない。・・・冒頭にラスベガスが安全と書いたが、現地で聞いた話であるが、ここで犯罪が発生したら (たとえばホールド・アップなど)、一攫千金を目指してやってくる客が来なくなる。だから警察のみならず、ホテルや胴元が自前でガードマンを雇っている。暗がりではどうかわからないが、彼らの目が届く範

囲では、安全が保障されている。・・・東京は安全とオリンピック招致委員会は言うけれども、真夜中にコンビニにでかけた女の子が殺されている。いくら「安全」といってもそんな時間に屋外に出るほうにも問題があるが、今回のトルコの場合は違う。白昼、予期せぬところに突然に凶悪犯が現れた。ただ、単にこのような打算的な行為とのみ言うのは失礼かもしれない。心の底から彼女らを悼んで集まった可能性が高い。

さらにトルコと日本には浅からぬ因縁がある。明治 23 年、オスマン・トルコの軍艦エルトゥールル号が表敬訪問したのち、650 人あまりを乗せて紀州沖で岩礁に激突して沈没したため多くの生命が失われた。このとき、和歌山県民が命を賭して救出にあたり、1 割強の 69 人の生命を助けた。10 日後トルコまで軍艦「金剛」で送り届けた。

まだある。オスマン・トルコは、13 世紀末から 20 世紀初頭まで帝国であり続け、イスラム諸国の中で最大の版図を有し、最強ともいえる国家であった。ところが、この強いオスマン・トルコが 10 回戦ってどうしても勝てなかった国がロシアである。明治 37 年、日本というロシアからみれば豆粒のような小国が、いわば捨て身でロシアに宣戦布告した。

(これを、日清戦争も日露戦争も侵略戦争だという人がいるらしいのだが、事実なら、馬鹿な考え方をしている人がいるものだ。当時の状況を、世界の情勢を少しでも理解しようとしたなら、こんな考え方が出てくる余地がないだろうに。狂っているのか、理解力が悪いのか。) 井上馨のような男でさえ、涙をポロポロ流し、敗ければ日本は滅びるのだ、と語った。陸軍は、津波のように押し寄せる世界最強の陸軍を擁するロシア軍に圧倒されながら、なんとか互角乃至互角以上の状態に持ち込んだ。トルコ人たちは、まるで速報を見るかのように戦況に詳しかった。海軍は、旅順艦隊、ウラジオストック艦隊を個別に撃破し、バルチック艦隊との決戦に、世界中が信じられない圧倒的な勝利をおさめた。トルコは狭い海峡を利用してロシア艦隊の邪魔をした。そして日露戦争に日本が勝利した。このため、トルコでは、東郷（トーゴー）や乃木（ノギ）という名前を子供や孫につけた。通りの名にもこれらをつけた。それほど彼らの、ロシアの圧迫に対し、またロシアに対する怨念が強かったわけで、心から喜んだわけである。

さらに、米国がハワイ諸島を強奪した時、日本の軍艦が抗議に出かけたこともトルコ人たちに喜ばせた。日本の軍艦が 2 隻、米国軍艦をはさむように停泊したという。さらに、祝砲を撃ってくれという要請に、「金剛」艦長の東郷平八郎は、その要を認めず、と祝砲を撃たず、そのためか他の国も撃たなかった。

1985年、イラン・イラク戦争の際、サダム・フセインはイラン上空を飛行するのは民間機でも撃墜すると言った。イランに残された邦人は、日航は来てくれない。自衛隊機は社会党などの反対で飛べなかった。(社会党というのは、日本人の命よりも自らの党の利益を大事にする、という奇妙な政党である。今でもそうだが。) 首相は、中曽根で、終戦記念日の靖国参拝を国内の世論が反対すれば、いろいろな考え方がございますからと相手にしなかった。ところが中国がクレームをつけると慌てて中止することにした。このとき以来公人であれ私人であれ、閣僚、とくに首相の靖国参拝ができなくなった。ほんまに情けない。こんな首相だから、イランまで日本航空はおろか自衛隊機を飛ばすことなど望むべきもない。250人以上の邦人が困っている時、トルコ機2機が日本人を乗せてくれて全員イランから空路脱出できた。エル・トゥールル号へのお礼である。

2013年、再び因縁ができた。2020年のオリンピック招致運動である。上のような経緯を知ってか知らずか、イスタンブールと名指してはいないが、東京都知事がイスラム圏を貶めるようなことをしゃべってしまったのだ。折柄、訪問中の安部首相がフォローした事や今までの経緯から好意的に対応してくれて事なきを得たが、みっともない男だ。

2020年のオリンピックは、マドリードにほぼ決まりかけていたが、前日の新聞に誰がマドリードに投票したか、などとはしゃいでしまって、一部の委員から嫌われてしまった。結局、イスタンブールと東京との決選投票になり、東京招致が決定した。首相や知事やオリンピック選手たちのプレゼンテーションがあり、決め手になったのは、パラリンピックの佐藤真海選手の半生の話が満場を感動させた、こともあるらしい。骨肉腫で下腿を切断し、実家が津波で流されたことも、あまり上手ではないけれども一生懸命に語った。なんとかいうアナウンサーがフランス語で語り、最後の「お も て な し」も好評だったという。トルコのプレゼンテーションは聞いていない(聞いてもわからないが)けれども。いずれ東洋と西洋の架け橋として(トルコは西欧に属したいが)イスタンブールでオリンピックが開催されるだろう。

トルコ人の代わりに言う、「どうかこんなことで嫌わずに是非カッパドキアを訪れてほしい。」それが、彼らの謝罪に対する感謝の気持ちの表れになるだろう。・・・変態は、どこにでもいる。